

はじめに

21世紀を目前にして、スポーツの現状をどう認識し、その未来をどう描くのか。スポーツに知的好奇心を抱く者すべてにとって、避けて通れないテーマである。我々の属する一橋大学スポーツ科学研究室もまた、ここ数年、そのようなテーマを意識して研究活動を行ってきた。

スポーツ科学研究室の研究年報は、前年度における研究活動の成果を収録することを通例にしている。ただし、昨年度は、通常の研究活動の多くが、文部省科学研究補助金「基礎研究(C)」にもとづく我々の研究プロジェクト「スポーツのグローバリゼーションと多元性」の第2年次とオーバーラップすることになった。したがって、今年の研究年報の内容は、そうした事情を反映するものになっている。

「スポーツのグローバリゼーションと多元性」——このフレーズをもって、我々は、世紀転換期のスポーツの何を、どう読み解こうとしているのだろうか。我々は研究の出発点において、スポーツのグローバリゼーションを「ナショナルやインターナショナルなレベルでは捉えられない超国家的なスポーツ活動の展開」と把握し、国際スポーツ組織やメジャースポーツ中心の一元的なグローバル化だけでなく、「生活や生き方に応じたそれぞれ固有の多元的な文化としてのスポーツに目をむけ、両者の関係とそれぞれの戦略を明らかにしよう」とした。だが、答えを出すことは容易ではない。なぜなら、「グローバリゼーション」という概念自体が多義的であることに加え、この概念が現代スポーツ分析の基軸的装置たりうるかどうかをめぐり、なお議論の余地があるからである。

けれども、現代のスポーツは、メディアおよび資本と提携を強めながら、地球規模における政治的・経済的・文化的・社会的な相互依存関係とそのネットワークを拡大させる重要な作用因になっている。それだけではない。逆に、そのような事態を西欧化・アメリカナイゼーションとして「批判」し、「対抗」「再解釈」しようとする動きも現われているのである。我々が現代スポーツの展開を、「スポーツのグローバリゼーションと多元性」という枠組みのもとで究明しようとしたのは、そのような事情を意識してのことであつた。

この研究年報に掲載された論稿の多くは、上述の問題意識にもとづいて執筆されたものである。しかし、我々の研究は、いまだ通過点を示すものであるに過ぎない。忌憚のないご意見・ご批判をお寄せいただくことを期待している。

2000年8月15日

一橋大学スポーツ科学研究室室長

高津 勝